

## — 紙 碑 —

バンディングの草分け、吉井 正氏の死を悼む

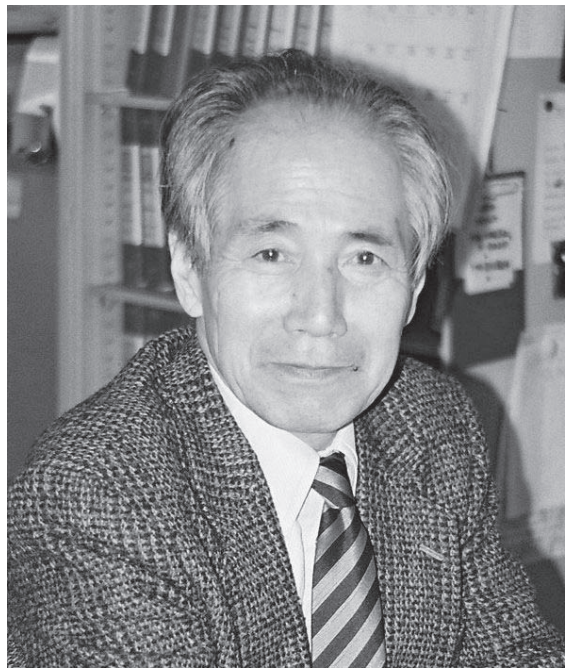
唐沢孝一

本学会元副会頭の吉井 正氏が2012年12月26日に他界された。享年91歳。鳥類の標識調査一筋に鳥学発展に寄与した見事な人生であった。

吉井氏は1921（大正10）年東京の下町・墨田区で生まれ、1934年に府立三中（現都立両国高校）に入学。戦前の男子校における厳しい授業・軍事教練により心身を鍛えかつ自由闊達な校風のもとで5年間を過ごす。在学生には吉田 亮（中国哲学・第9代千葉大学学長）、高木友之助（公衆衛生学・中央大学総長）、奈良林祥（性医学）など多士済々。また、博物学を八尋三郎教諭に学んだ。吉井氏によれば、八尋教諭は1938年の夏休み、生徒を引率しての10日間の小笠原諸島への研究旅行を実施するなど当時の博物学教育の第一人者であり、氏の自然観に大きな影響を与えたという。吉井氏の庶民的感觉と反骨精神の基盤はこのころに形成されたものと思われる。

府立三中卒業後、専修大学経済学部に進学。戦時下の1943年に海軍予備学生（館山海軍砲術学校）、1944年海軍予備少尉として終戦。戦後、1946年よりGHQ経済科学局翻訳通訳部に勤務。その語学力を発揮する。1950年より約8年間、米軍医学総合研究所鳥類室に勤務。渡り鳥調査に従事した。その後、アメリカ自然博物館協力員をへて1960年に山階鳥類研究所に入所し鳥類標識室（現保全研究室・鳥類標識センター）の室長として日本における標識調査・渡り鳥調査の礎石を築く。1986年発足の日本鳥類標識協会の会長（1992-2003）、2010年より名誉会員。吉井氏といえば「標識（バンディング）」、標識といえば吉井氏の名を思い浮かべる方も少なくあるまい。標識調査は鳥の渡りのルートや寿命の解明のみならず、蓄積された膨大な記録のデータベース化により地球規模の環境変化をも視野に入れた研究に貢献するなど、今やその重要性と活用範囲は増すばかりである。

氏の著書『わたり鳥』（1978、東海大学出版会）は、標識調査の重要性を日本で初めて世に問うた名著であり、標識の意義が広く世間に認知されることとなった。本書推薦文の中で山階芳麿氏（当時山階鳥研理事長）は氏を評して「渡り鳥調査に従ってきたこの道の権威で、世界でも Mr. Yoshii の名は広く知られている」と記した。また、吉井正監修『世界鳥名事典』（2005、三省堂）は、座右の書として研究・執筆・マスコミ報道等で幅広く



吉井 正氏（山階鳥類研究所提供）

利用されている。

他方、吉井氏は本会役員として長きにわたり学会の運営に寄与された。庶務幹事（1962-75年）、評議員（1976-88年）、副会頭（1979-82年）、監事（1989-90年）等を歴任。1988年度日本鳥学会大会（我孫子市民会館）実行委員長としての重責を果たした。また、氏の語学力と交遊関係の広さは、渡り鳥条約締結や外国人研究者の招聘（ソ連バンディングセンター所長イリチョフ教授など）等でも発揮された（鳥学ニュースNo.11）。1980年代の学会幹事会は、当時庶務幹事の任にあった筆者の勤務先（両国高校、吉井氏の母校）で行うことが多かった。時に吉井氏も参加し歓談を楽しんだ。氏のご自宅でのこと。電話が鳴ったので奥さんが受話器をとったところ「ヒタチです」。「お父さんヒタチ電気ですよ」「電話に出てみると常陸宮様であった」など、吉井氏の語り口を懐かしく思い出す。宮様は侍従に電話を取り次がせるのは失礼と考え、ご自身でダイヤルされたようである。渡り鳥調査報告書の一つに常陸宮正仁・吉井 正「鴨場におけるカモ類の捕獲数の変化」（1974、山階鳥研報7）がある。

人情あり、ユーモアあり、反骨精神あり。愛国心と国際感覚を持ちあわせ、けっして偉ぶらず、学会組織の潤滑材となって後輩を励ましてくれた。学会創立100年にあたる記念の年に、学会の歴史を知る生き字引のお一人が他界されたのも他生のご縁かもしれない。安らかに眠られんことを祈る。

（都市鳥研究会顧問）